平成 22(2010)年度　大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業
実証実験　報告書

続・こころの活性化

立正大学地球環境科学部地理学科

熊谷地理研究会 GeoStick

地理研究サークル　熊谷地理研究会
GeoStick

目次

Ⅰ　はじめに 1
1．サークル概要 1
2．地域概要 1
3．平成 21（2009）年度の成果 2
(1)事前ワークショップ 2
(2)聞き取り調査 2
(3)ひまわり会議 4
(4)調査を通しての変化 5
Ⅱ　平成 22（2010）年度の事業内容 7
1．年間計画 7
2．高部姫プロジェクト 8
(1)「高部姫」名付けの経緯 8
(2)田植え 8
(3)稲刈り、はせ掛け 9
(4)精米、パッケージング 9
(5)星霜祭（立正大学熊谷校舎での大学祭） 10
3．夏祭りービアガーデン、盆踊り 11
4．秋祭りー例大祭、餅つき、川前音頭 11
5．ひばり会（カラオケ大会） 12
6．高部 PR 大作戦－HP、高部新聞、大交流フェア 13
(1)高部新聞の発行・活用 13
(2)web での情報発信 14
(3)ほっとする、ふくしま。大交流フェアへの参加 14
7．集会所の活用 15
Ⅲ　事業結果 17
1．アンケート結果 17
(1)アンケート調査質問項目（大変満足～不満の 5 段階で評価、自由回答） 17
2．調査を通しての変化 20
3．宿泊・食事・入浴等に関する課題 21
Ⅲ　５０年後も高部を存続させる 22
1．計画の目標 22
2．計画 22
(1)楽しみの創出（高部体験と大学生によるイベント盛り上げ隊） 22

⑵安心の創出 25
(3)情報の創出（PR 大作戦） 25
3. 今後の事業計画 27
Ⅳ　おわりに 29

Ⅰ　はじめに

1. サークル概要

「地理を知りたい！！」という思いから 2008 年 5 月に発足した立正大学の文化学芸愛好団体（サークル）です。地理学とは「地域」を様々な側面から研究する学問です。地理学という視点から様々な地域を研究していこうと考えています。現在、立正大学地球環境科学部地理学科の学生 11 人が所属しています。大学の所在地である熊谷を中心に、地域活性化や里山保全活動など、地域にかかわる幅広い活動を行っています。

2. 地域概要

いわき市川前町高部地区は、いわき市の北東部の川前町下桶売地区にあります。JR 磐越東線川前駅から北へ約 5km に位置しています（図 1）。

旧川前村は、昭和 41（1966）年いわき市誕生の際に他の 13 市町村とともに合併に参加し、いわき市の一部となりました。合併前の昭和 38（1963）年には人口 3,636 人、694 世帯が暮らしていましたが、平成 21 年には人口 1,391 人、511 世帯と大幅に減少しています。全国の中山間地と同様に、少子高齢化が問題となっています。

高部地区は、2008 年現在 20 世帯 47 人が暮らしていますが、30 歳以下はいません。55 歳以上の割合は約 77%、65 歳以上も約 50%と、人口構成のみを見ると、いわゆる「限界集落・準限界集落」となりつつある状況にあります。

平成 17（2005）年 10 月以前は、JR 磐越東線川前駅と上高部を結ぶ常磐交通（当時）の路線バスが通っていました。また、タクシーは川前駅前にありましたが廃業しています。このため、住民の足は自家用車のみとなっています。

高部地区の主な産業は林業でしたが、現在では農業のほか、平・小野町方面への通勤者が中心となっている。

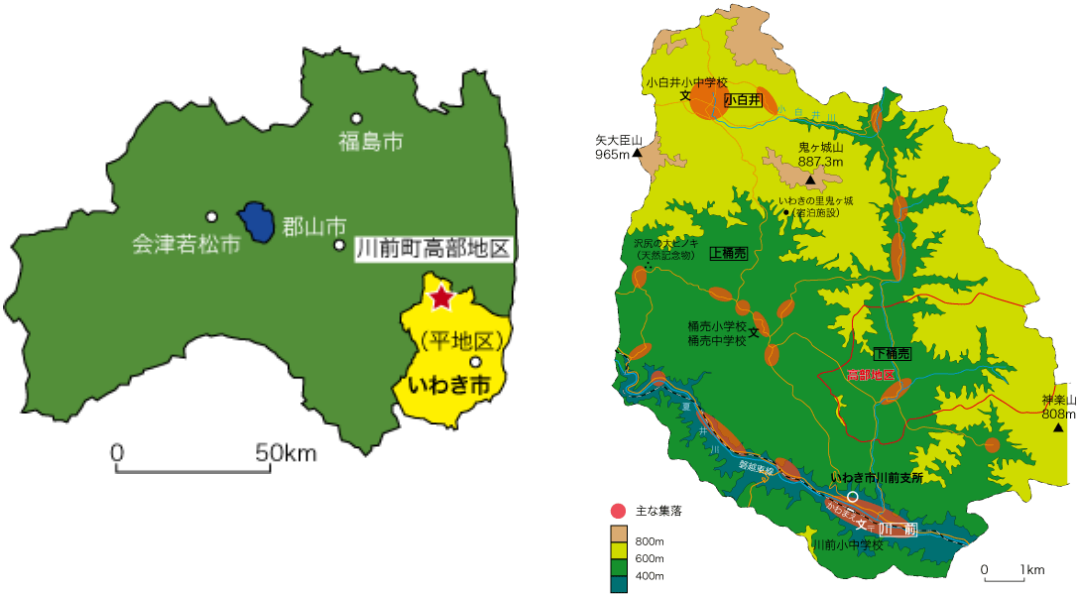

図 1　高部集落の位置

3. 平成 21（2009）年度の成果

(1)事前ワークショップ

いわき市川前町高部地区を訪問する前に、高部地区の事前イメージをまとめる事を目的として、学生でワークショップを実施しました。地域概要や過疎集落へのイメージを、ＫＪ法を用いてまとめた結果、自然や観光資源が多い事、地区内に子供がいない事、病院や学校などの施設が少なく距離も遠い事、交通の便が悪い事などがあがりました。

プラスのイメージに比べてマイナスのイメージが多く、訪問前は本当に集落活性化が出来るのかという不安が強かったです。また、高部地区に対するイメージもワークショップで得た知識があるだけで、まだ漠然としたものでした。

(2)聞き取り調査

現地では地区内の全戸を訪問し、住民の皆さんから聞き取り調査を行いました。まず、生活に関する質問では、商店が遠く、移動販売に頼るなど普段の買い物が困難である事や、公共交通機関が無く、病院などの各種施設を訪れるためには自動車が必須であるという回答が多くありました。また一人暮らしが多く、新聞や郵便、回覧板がコミュニケーションをとる重要な手段であるという回答もありました。

自然や景観に関する質問では、鹿又川渓谷では魚が取れる事や秋の紅葉がきれいな事、山では山菜が豊富で蛍などの昆虫も多い事、また、イノシシが多い事などの回答が得られました。これらは住民の皆さんが子どもの頃に外で遊んだ時に知ったものが多いようでした。

産業に関する質問では、かつて林業が盛んで、その他に炭焼きや養蚕も行っていた事、今は米を主体として農業を行っている事が分かりました。また、現在はどの産業も衰退または消滅し、農業は昔からの習慣で行っているという回答や、農業は健康のために行っているという回答もありました。

地区の現状や展望および活性化に関する質問では、子どもが市街地に出て行ってしまい、年に数回は帰ってくるが後継者がいない事、老人会や婦人会の旅行があり楽しみにしている事、空き家があり放置したままである事、などの回答が得られました。また、高部地区や川前町が好きかという質問に対しては賛否両論がありました。昔から生活してきた土地であり高部地区が好きだという意見や、将来の予想がつかず不安という意見があがりました。

大学生が地区にやってくる事や、農業体験など通じて交流を行う事に関する質問においても、毎年来てほしいという意見や、抵抗があり負担も増えるため積極的ではないという意見がありました。聞き取り調査後に、得られた意見をＫＪ法でまとめました（図 2)。

写真１　聞き取り調査のようす

写真２　聞き取り調査のようす

図２　高部集落の意見・キーワード

⑶ひまわり会議

地区での聞き取り調査の結果をもとに、住民の皆さんとの交流を図る目的で会議（ワークショップ）を行いました。私たちは、ひまわりのような明るい地区になる事を願って、その会議を「ひまわり会議」と名付けました。会議ではまず聞き取り調査の報告を行い、住民の皆さんがどのような思いをもっているかを確認しました。住民の皆さんからもあまり知られていない伝説や昔話などの話が出てきました。

次に、収集された情報が地区のどの地点にあたるのかを地図上で付箋を貼って確認する作業を行いました。そしてその地図は、集落の良いところを集めた「いいところマップ」となりました。地図化の作業では学生と住民の皆さんが意見を出し合い、時には住民どうしで熱く議論する場面もあり、楽しんで作業を行う事が出来ました。

最後に高木先生による講演がありました。地域を盛り上げる人物である「よそ者、ばか者、若者」についての話や、地域を盛り上げるためには地域の度量が必要である事を、ポパイとホウレン草に例えた話などの内容でした。

短い時間ではありましたが、高部地区を知るとともに、住民の皆さんとの距離を縮められた貴重な時間となりました。

写真３　ひまわり会議の様子

写真４　ひまわり会議の様子

写真５　A 班のいいところマップ

写真６　B 班のいいところマップ

⑷調査を通しての変化

今回の調査を通して、学生と住民の皆さんの両方に変化がありました。学生の変化としては、高部地区に対するイメージが変わった事があげられます。事前調査では高部地区に対して比較的マイナスのイメージを抱いていました。また、他の地域の事例も調べてみたところ、本来主体となっていくべき住民に意欲や気力がなく、外部の人間に対して内向的であるために活性化策が思うように進められず、行動に移すことができないというケースもあることを知りました。このため、「本当に活性化なんてできるのだろうか？」と不安が募る一方でした。

しかし、現地での聞き取り調査を通して、住民の皆さんの「優しさ」や「もてなしの心」、「心の温かさ」を感じていく中で学生の不安が徐々に取り除かれていきました。聞き取り調査後のワークショップでは、住民の皆さんが積極的に意見を出し合い、「高部もやるじゃないか」、「まだまだいける」といった感想を聞くことができました。その結果、学生の中で「絶対に何とかしよう」という意気込みが生まれました。

住民の皆さんの変化としては、自身の住む地域である高部地区に対するイメージが変わった事があげられます。最初の聞き取り調査を行っている際には、高部地区に対して関心のない住民も多く「何もないから（高部地区が）好きではない」、「将来が不安」、「車がないと動けない」など後ろ向きの意見が多数見受けられ、少し不安な面もありました。しかし、ひまわり会議では白熱した議論の中、住民同士でさえ知ることのなかった名所や言い伝えを互いに共有することができ、「意外にいいところがたくさんある」、「高部もまだまだいける」、「ふるさと再発見だね」など多くの前向きな意見が出てきました。

この一連の調査が、高部地区に潜在していた魅力を引き出す一つのきっかけとなりました。

写真７　学生の変化

写真８　住民の変化

Ⅱ　平成 22（2010）年度の事業内容

1．年間計画

5 月 22 日	高部姫田植え体験
8 月 6 日	午後：現地入り、事前ミーティング
8 月 7 日	午前：実態調査 午後：実態調査、まとめ作業、ホタル観賞会
8 月 8 日	午前：高部姫草引き・草刈り体験 午後：まとめ作業、準備作業 ビアガーデン、盆踊り（川前音頭）
8 月 9 日	午前：予備調査、高部振興策策定会議
9 月 26 日	高部姫稲刈り・はせ掛け
10 月 9 日	高部振興策策定会議
10 月 10 日	高部区例題祭参加
10 月 29～31 日	立正大学学園祭にて高部姫・焼きおにぎりの販売 餅つき、大学内の見学
11 月 20 日	集落活性化県民討論会 in 福島
11 月 22 日	集落活性化県民討論会 in 会津 集落活性化のための打ち合わせ（いわき市）
12 月 11 日	第 3 回ひまわり会議、忘年会
12 月 19 日	ほっとする、ふくしま。大交流フェア（池袋サンシャインシティ）
3 月 19 日	第 4 回ひまわり会議
3 月 20 日	高部区地域資源調査

2. 高部姫プロジェクト

(1)「高部姫」名付けの経緯

高部地区ブランド米「高部姫」、この米は私達と住民の皆さんとで作った「あきたこまち」に名付けた名前（ブランド）です。この米は集落の水田で作り、住民の皆さんと学生の手によるはせ掛け（天日干し）で自然乾燥をさせたものです。高部姫の由来は、この米が地区に大事に育まれた美しい姫のような存在になってほしい、また、地区の女性方(高部の姫たち)に育てられる米という二つの意味をこめて学生側から提案しました。そして、住民の皆さんからも支持を受けて命名されました。

契機となったのは平成 21 年 11 月に会津若松市にて開催された県民討論会でした。討論会にて国士舘大学宮地ゼミが活性化対象集落で作られた農産物を大学祭で販売し、集落住民に利益を還元しているという発表をしていました。この取り組みに影響を受け、何かしらの農産物栽培体験と大学祭での収穫物販売に挑戦してみようという機運が生まれました。

翌平成 22 年 3 月に農業体験の話題が出ました。その際に、「米作りをやってみないか」という話題で話が盛り上がり、田植えの日程まで決定し、稲作体験に取り組むことになりました。そして、栽培する米に名前を付けようという話が出た時に、住民の皆さんから、日本テレビ系列で放送されている人気テレビ番組で「男米」を栽培しているので、高部集落では「女米」をつくってはどうかという提案がありました。これに対して学生から「『女米』では野暮ったい。『高部姫』はどうだろうか。」との発言がありました。この提案に一同が引きつけられ、学生と地区住民が栽培する米の名前が「高部姫」と決まりました。

(2)田植え

５月に住民の皆さん約 20 名から指導を受けながら、田植えを行いました。参加した学生 5 名のうち、実家が農家という学生もいましたが、ほとんどは田植えの経験のない学生ばかりでした。ぬかるんだ地面に足を取られながらも、地区の名人達の後に続いて苗を植えました。しかし、植えた後を振り返ると、苗は右に左に行ったり来たりで上手くはいきませんでした。それでも次第にコツをつかみ、等間隔に苗を植えました。学生と住民の皆さんの笑い声が絶えず、約 1 時間で田植えが終了しました。とても貴重な体験をすることが出

来ました。

写真 9　田植えの様子

写真 10　集合写真

(3)稲刈り、はせ掛け

秋の収穫作業にあたって、収穫方法について事前に深夜まで話し合いをしました。その結果、「高部姫」をブランド米として PR するために、手で刈り、はせ掛けをしたほうが良いということになりました。しかし、これらの作業は、素人には難しい上、はせ掛けした稲は風雨にさらされる心配もあります。そのため、住民の皆さんに手刈り、はせ掛けの指導と干した稲の管理をお願いすることになり、事前に了解を得る事が出来ました。

収穫作業は学生と住民の皆さんが共に行いました。ほぼ素人である学生に、住民の皆さんは鎌の使い方などを教えてくれました。住民の皆さんは、学生が刈り残したところを、隅々まで刈り取っており、ここから、食べ物を大切にする精神を学びました。後日、収穫されたお米「高部姫」は大変好評であり、はせ掛けを選んだことは大正解でした。

写真 11　稲刈りの様子

写真 12　はせ掛けの様子

(4)精米、パッケージング

精米は、高部地区の「精米名人」に依頼しました。パッケージは学生が考え集落に提案・承認されたものを用いました。パッケージを作成にあたり気をつけたのは「色」です。色が与える心理的な効果は大きく、購買意欲を無くすような紫・黒・茶系の色を極力使わずに快活さ、明朗さ、あたたかさを強調する枯れた稲の色（黄色）をパッケージの表に使用しました。商品名の「高部姫」はパッケージの中央に大きく記し、その横には高部地区で

一から手作りをしたことがわかるように「福島県産手作米」と記しました。手作り感とあたたかさを引き出すために表パッケージの書体は全て行書体としました。

パッケージの裏は表示しなくてはならない「名称」、「産地」、「品種」、「産年」、「精米年月日」、「生産・販売者」などの事項のほか、高部姫の由来や概要について記載しました。その上下には「私たちが育てました！」という文字通りの田植えと稲刈りの様子、稲作に携わった学生と住民の皆さんとの集合写真を載せました。

図３　高部姫パッケージ（表）

図４　高部姫パッケージ（裏）

(5)星霜祭（立正大学熊谷校舎での大学祭）

星霜祭では、高部姫と熊谷でつくられている醤油を使用した焼きおにぎりの販売を行いました。醤油は、「熊谷むらさき」を醸造元のきんまる星醤油㈱から提供してもらいました。これにより立正大学熊谷校舎での熊谷と高部地区のコラボレーションが実現しました。

大学祭２日目には、住民の皆さんも参加して、高部地区で生産されている野菜や高部姫の販売、餅つきの実演を行いました。野菜販売では、住民の皆さんが販売に加わることでにぎやかになり、模擬店を覗いていく人も多かったです。台風が直撃する中、ある程度の売り上げを確保することができました。とくに、野菜や高部姫の販売は、事前にホームページ等で告知していたため、企画の存在を知っている方が多いと感じました。

写真 13　焼きおにぎりの調理風景

写真 14　餅つきの様子

3. 夏祭りービアガーデン、盆踊り

8 月には夏祭りとして、高部集会所前で盆踊りとビアガーデンを行いました。これらは、昨年度のひまわり会議で開催しようと決定したものです。盆踊りと合わせた夏祭りの計画として実施しました。ビアガーデンでは、ビールサーバーによる生ビールのほか、住民の皆さんによるバーベキューがふるまわれました。

盆踊りでは、以前使われていた太鼓の音に合わせて、参加したみんなで川前音頭を踊りました。復活させた太鼓は、集会所の脇の倉庫に眠っていたもので、かつて、高部集落の夏祭りで使用していました。30 年以上使われていなかったのですが、傷みは少ないものでした。太鼓による盆踊りのリズムが集落に響く中、住民の皆さんはかつての盆踊りを思い出しながら踊っていました。

写真 15　盆踊りの様子

写真 16　ビアガーデンの様子

4. 秋祭りー例大祭、餅つき、川前音頭

毎年 10 月の第 2 日曜日に行われる高部集落例大祭に参加しました。昨年に続いて 2 回目の参加となり、参拝だけではなく早朝からの参道整備も手伝いました。

昼前には参拝が終わり、午後は住民の皆さんと食事をしながらの懇談となりました。 食事会では、住民の皆さんから天然マツタケのおにぎり、天然ハチミツ、アケビ、新米を使った餅、採れたての川魚、しし鍋などを頂きました。

写真 17　お手伝いの様子

写真 18　食事会の様子

5. ひばり会（カラオケ大会）

12 月には高部集会所にて、集落振興計画策定のための「ひまわり会議」と 1 年の締めくくりとして「忘年会」を行いました。忘年会は星霜祭（立正大学大学祭）に住民の皆さんが来た際、「一緒に忘年会をやってみてはどうか？」との提案を受け、ひまわり会議と合わせて行うことになりました。

昨年 8 月から高部地区との交流が始まって、今回が記念すべき 10 回目の訪問となりました。今回は初の試みとして、高部のブランド米である「高部姫」を用いた「カレーライス」を学生がつくり、住民の皆さんに食べてもらいました。「この米は美味いな！高部姫か？」などと感想を述べながら、学生からのささやかな “贈り物”に舌鼓を打っていました。

また、忘年会に合わせて 20 年以上活動が休止していた「ひばり会（カラオケ大会）」が復活しました。住民の皆さんが DJ 気分でノリノリであったり、デュエットに盛り上がったりする姿は、とても印象的であり大成功でした。

写真 19　ひまわり会議の様子

写真 20　ひばり会の様子

6. 高部 PR 大作戦－HP、高部新聞、大交流フェア

高部 PR 大作戦では、多くの方々に高部地区での取り組みを知ってもらうための広報活動を行っています。主に高部地区の出身者へ伝えることで、将来的な U ターンを誘引するものです。このために以下のような取り組みを行いました。

(1)高部新聞の発行・活用

今年度は、大学生が中心となって 4 月に第 1 号、10 月に第 2 号、12 月に 3 号を発行しました。昨年度の活動紹介から季節折々の地区行事、高部姫プロジェクト、10 月に行なわれた立正大学大学祭などの様子をお伝えしました。これらは、PDF ファイルとして熊谷地理研究会ホームページからダウンロードすることが出来ます。今後は、住民の皆さんから他地域にいる家族に向けて発送することで、家族の絆を深めるとともに、高部地区から離れて行った人たちの出身地に対する意識が高まっていくことを目指していきます。

図 5　高部新聞 1・2 号

(2)web での情報発信

高部地区での取り組みをより広く知ってもらうために、web を活用した情報発信に取り組んできました。現在は「熊谷地理研究会」のホームページを利用して、情報発信をしています。昨年度の報告書の概略版や高部姫プロジェクトの紹介、ブログを活用した情報発信などを行っています。

図 6　熊谷地理研究会 GeoStick ホームページ（http://geostick.jimdo.com/）

(3)ほっとする、ふくしま。大交流フェアへの参加

平成 22 (2010) 年 12 月 19 日にサンシャインシティで開かれた「ほっとする、ふくしま。大交流フェア」に参加してきました。福島県の魅力を紹介する大規模なイベントで、福島県にある伝統的な郷土品や昔から食べられていた伝統的な料理、更にはＢ-1 グランプリに出場するような B 級グルメの販売、県の魅力を紹介するブースなどが出店されました。

今回はいわき明星大学・国士舘大学と共同で、展示ブースを借りました。そして、①自分達が担当した各集落で、今まで何をしてきたのかの展示（いわき明星大・立正大)。②担当した集落で作ったモチ米を加工した餅の販売（国士舘大）を、行いました。私達は主に「高部新聞」を配布して、これまでの高部地区での活動をアピールしました。

7. 集会所の活用

昨年度、調査訪問した際には近くにあるいわき市の宿泊施設「鬼ヶ城」に宿泊していました。宿泊施設を利用する場合は食事や入浴、宿泊などでの負担として、宿泊費一泊 8000 円がかかっていました。この負担を軽減するために集会所を活用し、学生の宿泊先とすることになりました。これは将来の民泊も視野に入れた取り組みでもあります。

集会所を一時的な宿泊施設とすることで、大学生の金銭的な負担が無くなりました。また、ホテルから高部地区への移動がなくなり、住民との交流時間も増えました。しかし、食事の準備や入浴、寝具をどうするかということがでてきました。食事は、学生が食材を持ち寄り、調理をしているのですが、住民に対して、調理器具の貸し出しやごみの後始末を依頼せざるをえません。また、集会所には風呂が無いため、隣の川内村にある有料温泉施設へ移動するか、住民の風呂を借りなければなりません。前者は車を使い 20～30 分程度で行くことができますが、午後 9：00 までしか利用できません。後者の場合、住民は学生に風呂を貸し出すための心理的負担があると思います。

寝具は、高部地区の負担により貸布団を利用しています。これも集落にとっての負担となっています。

集会所を活用することのメリットとデメリットが分かりました。昨年度までの宿泊施設への宿泊と較べて、住民の皆さんとの距離が近づいたと思います。

Ⅲ　事業結果

1．アンケート結果

８月に高部地区活性化策策定のための経年調査をおこないました。調査は学生が各家庭にお邪魔し、聞き取り調査とアンケート調査をおこないました。

(1)アンケート調査質問項目（大変満足～不満の５段階で評価、自由回答）

質問１：この一年間の学生との活動をどのように感じていますか？

質問２：あなたの高部地区に対する意識は、学生が来る前と来て殻では、変わりましかた？また、何がかわりましたか？

質問３：学生が高部地区で行った活動は期待通りでしたか？それはどのような点で期待通り、または期待はずれでしかた？具体的にご記入ください

質問４：学生を受け入れることは、どのように感じていますか？

質問５：来年度以降も学生が来ることについてどのように感じていますか？

質問６：来年度以降も学生が来ることで、何か期待しますか？また、どのようなことに期待しますか？

質問７：この活動について自由にご記入下さい。

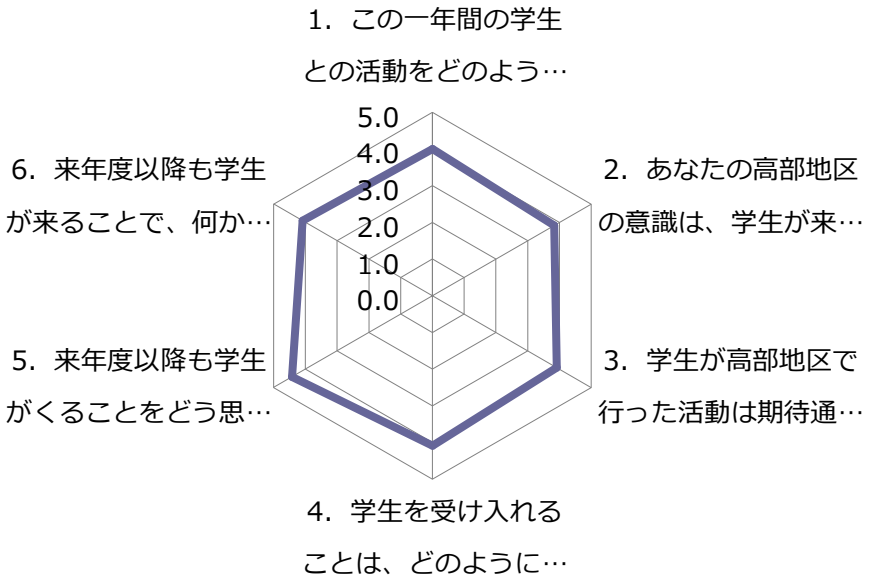

図７　住民の総合評価（N=13 の平均得点）

表１　住民の自由回答（その 1）

	質問１：この一年間の学生との活動をどのように感じていますか	質問２：あなたの高部地区に対する意識は、学生が来る前と来て殻では、変わりましかた？また、何がかわりましたか	質問 3:学生が高部地区で行った活動は期待通りでしたか？それはどのような点で期待通り、または期待はずれでしたか、具体的にご記入ください	質問４：学生を受け入れることは、どのように感じていますか
1	一年では何もわからない			
2	この一年間の活動（交流）は、お祭り気分である。これを今後地域活性化にどう繋げていくかが課題である	事業取り組みの問いかけに対して地区住民の反応は積極的ではなかったが、大学生の素直さに地域住民が一気に歓迎ムードになった。	ここまではお祭りムードの感じが強すぎて、学生さんたちの本来の活動はこれからだと思う。住民と大学生共にこれからである。大いに評価していますが、まだ早い。	来ていただくことで心が高揚する
3	集落がまとまった	物事をやろうとする協力が自分から進んでやることが出来た。		
4	若者の力が入ってよかった	高部の住民に、やる気がでてきた	住民とのコミュニケーションがとれている	若さで活性化
5	若い人たちとの交流が出来た《のでよかった》	外部の人たちの意見を聞き、地区の良さを発見できた		地区の活性化になる
6	①見ず知らずの人たち（特に大学生）との出会い　②現在の高部地区の状況を住民からの見た形③角度の違った学生（都会、熊谷地理研究会）から見た高部　率直な意見の交換ができて《よかった》	他人に高部地区の現状、過去、歴史を皆で話し合い、振り返る機会を与えた	今日まで歩んできた地区集落の過去、現在の若者（学生）が夢を見て進もうとする未来像、理想的に進むのは困難な事。まずは人造り、地区を背負って引き継ぐ人材《を養成する》。各家の伝統、家財をどう継続するか	まず若者がいない。活気がない。賞味期限切れの人たち（老人）
7	学生のパワーと情熱に感動した	地域の交流が多くなった。目が覚めた	私の考えより視野が広い	この集落には若者のアドバイス、力が必要だと思う
8	お祭りに参加し活気がつく	ふるさと再発見	部落活性化の為	学生との交流の為
9	学生がやってきた事はうれしいですが、帰ったとき寂しいです。	学生さんが来たときは人と人のつながりがあるが､《帰った》後はなにもない	田植えのように学生と部落との交流が生まれた	部落民交流があるから
10	学生さんの素直さに感動した	皆さん明るくなって良かったです	良くわかりません	思いません
11	眠っていた高部住民を目覚めさせていただいた。自分たちの家庭、部落では出来ない。大きな力を与えて頂き、新風を吹かせてもらったように思う	大学生が「何人来てくれるのか」「何月何日に来るのだ」と区長、班長に聞くと《いったような》部落民が一までになかった声のまとまりが生まれた。	まず会えたから。その場でしか盛り上がらない	落ちぶれる高部地区を少しでも良くしたいと熊谷の方からはるばる来て下さる。その心をありがたく深く感謝申し上げます。
12	何事も頑張っている姿がある	住民全体が協力的するようになった		
13	交流を通して若い感性を受け区が活気が出てきた	交流しながら区を見つめなおすことができた		多面からの区の活性化策を考えてくれるのは良いと思う。

表 2　住民の自由回答（その 2）

	質問 5：来年度以降も学生が来ることについてどのように感じていますか	質問 6：来年度以降も学生が来ることで、何か期待しますか　また、どのよなことに期待しますか	質問 7：この活動について自由にご記入下さい。
1			わからない
2	継続は力なりで、無理のない活動を交流で活性化に繋げたい	学生の発想、行動全て	この地域の休止農地を学生さんの力を借りて花を咲かせたい。　小さな集落で小さな規模でも花の里が出来たらすばらしいと思う。
3			1.2 年ではまだまだわかりません
4	これからも学生さんと話をしたいから	ますます集落の活性化を進めていきたい	発言したことをみんなで守ろう
5	とにかく閉鎖的になりがちなので《今後とも繰ることを期待する》	I ターンで部落内に住んでくれるかもしれないので	若者との交流又はイベントへの学生の参加は賑やかで大変良い
6	出会いを大切に。今後どんなドラマが待っているのか、お互いに身を共に話し合った過去を無駄にはしたくない。	他地区等の状況等を知り、当地区の良否、改善すべきポイント等はあるか《を明らかにする事を期待する》	このまま尻つぼみで消滅するか高部、そんな所へ一風入れた今回の事業。当初は他地区から「なんで高部が」という話題。現在は川前地区ほとんどが高部に見習え、あいまいな事業進展は望めないが、30,40 年かかって今日の状況になたものを、2.3 年で元に戻すのは困難。日本のふるさと再現には、県、国はもとより、国民一人一人が振り返る機会である。
7	顔なじみになり、気持ちも分かりあい、このまま続けてみたい	この集落にない都下《の人》にしかできない何かを学生たちで催してほしい。それによって皆がいってみよう《参加してみよう》という気持ちになるかも	小さい農村であって、それぞれ仕事を持って勤めています。経済面でも豊ではなく、日曜百姓で朝夕も農家のしごとで《忙しい》です。皆さんの協力がすばらしいと言われるような変化があった。
8			
9	心の交流	何か新しい事、考えに期待	何をやるにも部落民と学生の皆さんで相談して、また費用面でも考えること。行政役所とのつながり、高齢化により若い人についていけなくなる
10	高部のよさと田植え体験《を毎年続けてほしい》	高部の活性化のために《来年度以降も学生が来ることを期待する》	なし
11	学生の方に無理出ない限り交流して頂ければきっと益々頭の切り替えも出来、大いにプラスになると信じています。	私たちが今までマンネリしてしまった生活の中で《忘れていた》何かを思いださせてくれたり、新しい勉強になることがたくさんあると思うから。	
12	少し不安がある		
13	《今の学生が居る間は》地域特有の資源《清流や紅葉》を活用した活性化策を考えたい	時間をかけて取り組んでいかなければならないと思う	地域環境等に供している回りの広大な森林の大切さが注目されるような《活性化》方針を考える必要がある。（森林の整備、特に針葉樹から広葉樹への転換。これは広葉樹の持つ保水能力の高さなど特性が多く《地域資源として活用できると考えるから》これらの整備がすすめばいいと思う

2. 調査を通しての変化

昨年度の調査では集落の皆さんからのおもてなしに大変感動し、こころを打たれました。聞き取り調査で一軒一軒を訪問した際に、とうもろこしやスイカなどの旬の食材や、しみ餅という郷土料理にふれることができました。また、調査に慣れていなかった私たちに対して、集落の方々から進んで色々な話をしてくれました。

最初は活性化なんてできるのかと不安に感じていましたが、私たちはこうした人柄や郷土愛をもつ高部地区の雰囲気にすっかり飲まれてしまい、いつの間にか高部地区のことが大好きになってしまいました。第二の故郷として、できるだけ長く、今後も関わっていきたいという思いになりました。そして、高部集落をいい方向に導きたいと思いました。住民の皆さんのパワーで私たちの気持ちも大きく変化しました。

今年度の事業に移っていく中で、集落の方にも変化が見られるようになりました。ひまわり会議や例大祭などの行事に参加していなかった人も次第に参加し始めたことです。会話のなかでたくさんの笑顔を見ることができ、こころの活性化に役に立っているなと実感できました。それが最も実感できたのは立正大学熊谷校舎で行われた大学祭「星霜祭」です。高部地区から大学のある熊谷まで来て頂きました。星霜祭では「高部姫」や大根の販売、もちつき大会などを行いました。もちつき大会は雨が降る中での開催でしたが、他団体のブースが並ぶ中で一番の盛り上がりをみせました。高部地区の住民へのインタビューでは「彼らの若さからエネルギーをもらっている。今後もこの活動を細長く続けて、高部地区のこころを一つにしたい。」という言葉をもらいました。年末の忘年会では集会場に入りきれないくらいの住民の皆さんが参加をしてくれました。その際、今度は私たちが「おもてなし」をしようとカレー作りにも挑戦しました。また、忘年会の中で「ひばり会」が数十年ぶりに復活し、住民の皆さんの美声と力強い歌声が披露され、大いに盛り上がりました。

このような活動を通じて、住民の皆さんに「こころの活性化」を図ることができたと実感しています。第一にお祭りへの参加者が増えたことがあげられます。特に女性の参加者が増えたことが印象的でした。第二に私たちが来てくれることへの期待です。高部地区へ行くたびに「おかえり」と声をかけてくださり、「彼女連れてこなかったのか」と冗談半分でおっしゃる住民の方がいました。そこには「笑」という共通点があり、活性化に向けて地区の気持ちを一つにするきっかけを得ました。

3. 宿泊・食事・入浴等に関する課題

下記の表のように、宿泊にともなう様々な負担について、プラス面とマイナス面をまとめてみました。

表 3　宿泊にともなうプラス面とマイナス面

	プラス	マイナス
宿泊施設 ・鬼ヶ城	・食事の準備不要 ・入浴自由 ・寝具の必要なし	・学生の金銭的負担が大きい ・車で 20 分程度かかる（集落との距離がある）
集会所	・宿泊施設より安い ・近い（集落内にある） ・自分たちで食事を準備 ・民泊より住民負担軽い	・食事に関して住民の助けが必要 ・入浴の問題（温泉施設へ行く、または住民の風呂を借りるなど） ・寝具のレンタルが必要（集落の金銭的負担） ・ゴミの処理
民泊	・寝具のレンタル料金がかからない ・住民と触れ合える ・近い	・布団の準備 ・心理的負担大 ・学生間の意見交換がやりにくい

今後は、お互いの負担を軽減する工夫をして、より一層集会所を活用しながらも、もっと深く交流できるように、民泊の可能性を探っていきたいと考えています。

Ⅲ　５０年後も高部を存続させる

平成 22 年度福島県地域づくり総合支援事業（サポート事業）

過疎・中山間地域集落等活性化枠　集落等再生計画策定事業報告書より

1. 計画の目標

これまでの活動により得られた高部地区の魅力を活かすこと。住民が楽しく取り組めること、大学生と「細く長い交流」ができるために、「こころの活性化」をキーワードとすること。そして、現在交流している大学生が 70 歳代となる 50 年後も、高部地区が元気で交流できるように向けた準備をすること。これらを本計画の大きな目標とする。

＜計画の目標＞
・高部地区の魅力を活かす
・住民が楽しく取り組めること（こころの活性化 1）
・大学生との「細く長い交流」に取り組むこと（こころの活性化 2）
・50 年後の存続に向けた準備

2. 計画

上記目標に向けた、取り組みとして、次の三つの「創出」を主要な取り組みとする。

・楽しみの創出　・安心の創出　・情報の創出

また、本計画は単年度ではなく 3 カ年を予定している。

(1)楽しみの創出（高部体験と大学生によるイベント盛り上げ隊）

本計画の主な取り組みとなるのが「楽しみの創出」である。「行事」「交流」「文化」を 3 本柱が、この取り組みの大枠となる。

①行事

行事は、これまで続いている「伝統的な行事の維持」、これまでの事業で新たに取り組んだ「新規行事の継続」、そして以前おこなわれていた「行事の復活」の三つが主な取り組みとなる。

高部地区における各種行事は、住民同士の紐帯として機能してきた。しかしながら、少子高齢化の進展とともに、縮小傾向にあった。大学生の力を活用した集落活性化事業が契機となり、以前おこなっていた行事を復活させよう、新たな行事をやってみようという機運が出てきた。こうした機運を活かし、行事を継続していくことが重要である。

お祭り等の行事は、参加もしやすく、大学生との交流には適しているといえる。参加しやすい行事から、新たな参加者を呼び込み、高部地区との交流を深めていく機会としたい。

米作り体験は、地区内の休耕田を活用することができ、さらに収穫した米を大学祭等で販売することで住民、大学生ともに盛り上がっている。休耕田対策としては、お花畑プロジェクトを実施する。夏のひまわり、秋のコスモスを地区の名物に仕立てていく。花の季

節には、地区で取れた野菜などを物販し、現金収入になるよう取り組みをおこなう。こうした活動を継続的に取り組んで行く。

ひばり会の活動を各行事に取り込むことで、住民の活躍の場が広がることが期待される。また、大学生が「イベント盛り上げ隊」として参加することで、行事がよりにぎやかになり、活性化することが期待される。

表 2　取り組む行事

<table>
<tr><th>○伝統的な行事</th><th>○新規行事</th><th>○行事の復活</th></tr>
<tr><td>例大祭（秋祭り）</td><td>米作り体験（「高部姫」）</td><td>盆踊り</td></tr>
<tr><td>＜主な取り組み＞
・参道整備
・行事準備
・大学生との交流
・バーベキュー大会</td><td>＜主な取り組み＞
・休耕田活用とブランド米「高部姫」
・地区住民の共同行事
・大学生との交流
・田植え、草刈、収穫を体験
・収穫された米を大学祭等で販売</td><td>＜主な取り組み＞
・30 年ぶり復活
・太鼓の発見・復活
・「川前音頭」の踊り
・大学生との交流</td></tr>
<tr><td rowspan="2">＜今後の展開と課題＞
・集落出身者の参加
・ひばり会との組み合わせ</td><td>＜今後の展開と課題＞
・集落出身者の参加
・費用負担</td><td>＜今後の展開と課題＞
・集落出身者の参加
・ひばり会との組み合わせ</td></tr>
<tr><td>ビアガーデン</td><td>ひばり会（カラオケ同好会）</td></tr>
<tr><td rowspan="5"></td><td>＜主な取り組み＞
・集会所の活用
・盆踊りと同時開催</td><td>＜主な取り組み＞
・忘年会でのカラオケ大会</td></tr>
<tr><td>＜今後の展開と課題＞
・サーバーレンタル
・費用負担</td><td rowspan="4">＜今後の展開と課題＞
・各種行事での開催
・カラオケ練習の復活
・機械とソフトの更新</td></tr>
<tr><td>休耕田の活用（ひまわり・コスモス畑）</td></tr>
<tr><td>＜主な取り組み＞
・休耕田を活用したお花畑プロジェクト
・夏のひまわり、秋のコスモスを地域の名物にする</td></tr>
<tr><td>＜今後の展開と課題＞
・花の季節には物販予定
・メンテナンスと費用負担</td></tr>
</table>

②交流

平成 21 年度から 2 カ年にわたって取り組んできた「大学生の力を活用した集落活性化事業」は平成 22 年度を持って終了予定である。本地区にとって、今後も大学生との交流を柱に、地域振興を図っていくことが重要である。また、大学生との交流から派生する形で、地域外との交流が広がっていくことが期待される。

交流では大学生との交流を中心に、地区出身者で高部地区の外へ出てしまっている人々との交流（出身者との交流）を実施していきたい。この交流に活用する「高部新聞」についての詳細は、後述する。

交流の中身は、体験交流が中心の内容となる。また、「高部新聞」を活用して出身者への呼びかけをおこないながら、交流の輪を広げていく予定である。交流については、整理すると次表のようになる。

表 3　取り組む交流

○大学生との交流	○出身者との交流	○体験交流
学生参加・協働	「高部新聞」の活用	休耕田の活用
・各種行事参加 ・体験交流への参加 ・「文化」活動への参加 ・インターネット教室講師 ・集落活性化へのアイデア	・出身者への PR ・高部行事へのお誘い	・米作り体験（前述） ・ひまわり畑 ・コスモス畑
川前地区運動会への参加	福島県交流フェアへの参加	宿泊体験
・高部地区を越えた交流 ・運動会の活性化	・毎年 12 月東京で開催 ・東京で出身者との交流	・集会所の活用 ・空き家の活用 ・民泊の実施

③文化

高部地区に伝わる歴史、昔話等を発掘する。また、各家庭に伝わる習俗・行事・料理等を記録する。これらを集約し、文章化・地図化することで、高部地区の記録として残す。これら活動により、地区の魅力を住民が再発見することが期待される。この取り組みにも大学生との交流を活かしていく。

表 4　取り組む文化

集落の歴史・伝承	各家庭の習俗・行事・料理
・学生による聞き取り調査 ・ワークショップによる情報収集	・学生による聞き取り調査 ・アンケート調査
・住民による文献収集	・学生と各家庭による報告書作成
・学生と住民による報告書作成	

⑵安心の創出

過疎化が進行するなかで、安心してこの地域で暮らしていくため、主として情報インフラについての取り組みをおこなっていく。本計画での取り組みは、次の 2 点である。

・携帯電話環境の整備要請　・PC 環境のソフト・ハード両面での整備

①携帯電話環境の整備

現在高部地区では携帯電話がほとんど通じない状況にある。このため携帯各社・行政へのアンテナ設置を要請する。

また、携帯電話開通後には、携帯電話の使い方講座を実施する予定である。

②PC 環境のソフト・ハード両面での整備

過疎化が進行する高部地区において、医療過疎化や、今後予想される買い物難民化に対応するため、インターネットの活用が重要である。また家族間のメール活用など、インターネットが自由に使える環境・スキルがあれば、高部地区での生活がより快適になる。
このためのインターネット教室の開催、簡便なインターネット端末として iPad の導入、教室を開催する集会場への無線 LAN 環境を整備する。

また、教室の講師として、大学生の力を借りることで、大学生との交流機会を増やす。将来的には、住民による情報発信ができるようになることを想定している。

・インターネット教室（大学生講師）
・iPad の導入（各家庭 1 台を想定）
・集会所の活用と無線 LAN 環境整備（プロバイダ契約）

⑶情報の創出（PR 大作戦）

高部地区での取り組みを主に出身者へ伝えることで、将来的な U ターンを誘引する。このために以下のような取り組みをおこなう。

・「高部新聞」の発行・活用　・いいところマップの活用　福島県交流フェアの活用
・web の活用　・情報集約拠点の設置

①高部新聞の発行・活用

これまで大学生が中心となって編集・発行している「高部新聞」を、出身者へ送付し積極的に PR する。高部住民から他地域にいる家族に向けて発送することで、家族の絆を深めるとともに、出身地への意識を高めることを目的としている。

編集は当面大学生が担当し、印刷・発送等は地区住民が担当する。発行は季節ごとの年 4 回を予定している。

②いいところマップの活用

平成 21 年度の事業で作成した、高部地区のいいところを集めた「いいところマップ」を本格的に活用する。「高部に来て、住民と交流しなければわからない」地図という「いいところマップ」のコンセプトを活かしながら、マップの再構築をおこなう。

さらに、回覧板を通じた川前地区全戸配付、川前支所・公民館等での配付をおこなう。また、マップを活用した行事等は今後の課題とする。

③福島県交流フェアの活用

毎年 12 月に東京池袋サンシャインシティで開催される「ほっとするふくしま大交流フェア」への出店を通じて、首都圏在住の高部地区出身者との交流機会を設けていく。

出店に際しては、高部地区で取れたお米の販売などを想定している（いわき市のブースの一部での販売を想定)。

高部新聞による周知とともに、物販等で協力してくれる出身者を募る。

④web での情報発信

高部地区の取り組みをより広く知ってもらうために、web を活用した情報発信に取り組む。当面は「熊谷地理研究会」のホームページを利用して、情報発信をしていく。高部新聞と同じ内容を掲載予定である。

⑤情報集約拠点の設置

高部地区での上記活動をおこなっていくため、空き家を活用した活動拠点を設置する。あわせて、大学生等が高部地区での活動に参加する際の宿泊所としても利用できる施設としたい。空き家の候補があるが、賃料はじめ改修費、利用料等の検討が必要となるが、早急に設置を検討したい。

3. 今後の事業計画

事業計画を締めくくるにあたり、本計画の今後の展望を示す。

表 5　年度ごとの事業展開

年度	行事・交流関係	安心・情報関係
平成 23	・米作り体験（春・夏・秋） ・ひまわり畑（春～夏） ・盆踊り・ビアガーデン（夏） ・ひばり会（秋・冬） ※カラオケ機械更新・ソフト更新 ・学園祭への参加（高部姫ほか販売） ・ほっとするふくしま大交流フェアへの参加（高部姫ほか販売） ・空き家利用の検討（改修）	・携帯各社へのアンテナ設置依頼 ・行政への携帯アンテナ設置働きかけ ・集会所への無線 LAN 環境整備 ・iPad の導入（各世帯 1 台） ・インターネット教室開始（秋・冬） ・いいところマップの更新（配付） ・高部新聞の発行（年 4 回予定） ・web での情報発信（随時） ・活動拠点設置に向けて検討
平成 24	・米作り体験（春・夏・秋） ・ひまわり畑（春～夏） ・コスモス畑（夏～秋） ※ひまわり・コスモスの時期に物産を試験販売予定 ・盆踊り・ビアガーデン（夏） ・ひばり会（秋・冬） ・学園祭への参加（高部姫ほか販売） ・ほっとするふくしま大交流フェアへの参加（高部姫ほか販売） ・空き家（活動拠点）での宿泊開始 ・大学生との交流の輪を拡大	・インターネット教室（春・夏・秋・冬） ・インターネットを活用した事業検討 ・携帯各社へのアンテナ設置依頼 ・行政への携帯アンテナ設置働きかけ ※携帯電話アンテナ設置後は、教室開催予定 ・高部新聞の発行（年 4 回予定） ・web での情報発信（随時） ・空き家を活用した活動拠点設置
平成 25	・米作り体験（春・夏・秋） ・ひまわり畑（春～夏） ・コスモス畑（夏～秋） ※ひまわり・コスモスの時期に物産を販売予定 ・盆踊り・ビアガーデン（夏） ・ひばり会（秋・冬） ・学園祭への参加（高部姫ほか販売） ・ほっとするふくしま大交流フェアへの参加（高部姫ほか販売） ・活動拠点での宿泊 ・体験交流を一般にも拡大	・携帯電話メール教室開催（春・夏） ・活動拠点での情報発信開始 ・高部新聞の発行（地区主体へ） ・いいところマップの更新（地区主体で） ・web での情報発信（地区主体へ） ・ネット環境を利用した事業開始予定

本計画は、単年度ではなく 3 カ年とした。大学生との交流を軸に、継続することで交流の輪が広げていくことに重きを置いた。このため複数年の活動期間が必要である。

地区住民の高齢化が進むとともに、事業の継続が困難になることが予想される。しかしながら、出身者への参加を呼びかけるとともに、大学生のなかから新たな担い手が生まれてくる可能性もある。こうした可能性を広げる意味でも複数年の活動期間が必要とされている。

Ⅳ　おわりに

今年度は、高部集落と私たちが、より深く理解し合うことができた年だったと思います。昨年度は、調査や地域行事のお手伝いといったことしか出来ませんでした。今年度は、田植えや夏の盆踊り大会の実施など、今まで出来なかったことを始めることができました。これらの新しい取り組みは、集落にあった地域行事の停滞感を払しょくするだけではなく、住民と大学生がより深く関わっていく上で大切な事になりました。田植えをしながら「昔は腰が痛くなっても手植えを続けていた」、「お米というのはデリケート。だから一生懸命に我が子のように育ててあげないといけない」といった、それまで聞く事の出来なかった高部地区の「風土」を感じることができました。高部地区には、お米作りや里山の保全などの地域の魅力を作りあえている「人の魅力」を再発見できました。そして、この魅力的な風土を今後も残していきたいと強く思うようになりました。

今後は、このようなすばらしい風土をもった高部地区を 50 年後も存続させるべく、提案した活性化案を一つひとつ実施していきたいと考えています。50 年後も存続させるためには、高部地区に新しい住民を増やさなくてはいけません。多くの人が「住みたい」と思えるような高部地区にするために、自分たちの出来る事を精いっぱい頑張って行こうと思います。

最後に東北地方太平洋沖地震で高部地区を始めとした福島県、東北・関東地方で被災者された方々におかれましては、大変な思いをされていると思います。心からお見舞い申し上げます。被災地の 1 日も早い復興を願いますとともに、私たちにできることを全力でお手伝いさせていただきたいと思います。

2011 年 3 月

熊谷地理研究会 GeoStick 会長　浜田大介

平成 22(2010)年度

大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業　報告書

続・こころの活性化

編者：立正大学　熊谷地理研究会 GeoStick

（代表　浜田大介）

〒360-0194

熊谷市万吉 1700　立正大学非常勤講師室気付（高木）